香川の野鳥ファイル No. 43 ノスリ

四国では、現在冬鳥ですが…。

ノスリ　*Buteo buteo* は、ほぼカラス大で、下面の淡いバフ色に、脇～腹の褐色帯(いわゆるノスリバンド)と翼の翼角(初列風切の基部あたり)の褐色が目立つのワシタカ類です。本州から九州で繁殖し、屋久島以南では冬鳥とされています（日本鳥学会, 2012)。

このように四国も繁殖地域とされているものの、実際は香川県でも徳島県でも冬鳥とされ(四国新聞社, 1996 及び日本野鳥の会徳島県支部, 1985)、わずかに愛媛県だけ「一部のものは石鎚山系に留まり、繁殖しているといわれる」としています(愛媛新聞社, 1992)。

1978 年に実施された鳥類の繁殖分布調査でも、四国では愛媛県で 1 か所のみ繁殖の可能性があると示されており(環境庁, 1981)、残念ながら 70 年代後半には四国での繁殖は極めて稀になっていたと思われます。

▲ノスリ 2014.1.19 PHOTO◎岩田篤志

では、香川県ではいつまで繁殖していたのでしょうか。

まず、1968 年や 1975 年に刊行された文献では、「漂鳥」「本県に多い」とされています(岡内, 1968、香川県環境保健部, 1975)。この頃の具体的な観察年月日が記載された文献として「香川県鳥類目録　A list of Aves in Kagawa 1977. 11. 20」がありますが、これを確認したところ、冬以外だと 1976 年 5 月 7 日(高松市西植田町)と 1976 年 7 月 29 日(仲多度郡琴南町大川山)の記録がありました。西植田町は渡りとも考えられますが、7 月の大川山は怪しいところです。

また、五色台の観察鳥類を記録した目録でも、ノスリは「留鳥」となっていました(香川県教育委員会, 1972)。

これらから考えると、おそらく 1970 年代半ば頃までは、ノスリは県内では繁殖または越夏していた可能性があります。ノスリは成鳥の留鳥性が強く、冬でもつがいで繁殖地に留まり、しかもつがい関係は死ぬまで続くとのことですので(森岡ら, 1998)、あるいはこの頃、香川県で最後のペアの相手が死んだのかもしれません。

また、ノスリは開けた場所で狩りをすることが多く、林(繁殖場所)からさほど遠くない場所に農耕地や草地、湿地などがある環境を好むそうです。ヒナに運ぶ餌としてはネズミ、ミミズ、モグラ、カエル、ヘビの順に多いとのこと(森岡ら, 1998)ですので、やはり草地・農耕地が無いと繁殖はむずかしいのでしょう。

復活…する?

ところが 2000 年頃から、栃木県では低標高の丘陵や平地での繁殖記録が増加してきたそうです(野中, 2015)。ノスリは警戒心が強く、ちょうど繁殖時期に田植えや農作業が多いこともあって、まだ低標高地での繁殖成功率は高くないそうですが、今後どうなるかはわかりません。また香川県でも見られるように、山間部の耕作放棄地が増えている状況は、ノスリが好む環境の増加に繋がっているのかもかもしれません。

いずれにしても、香川県でノスリが繁殖しなくなってから、まだ 40 年余り。冬には比較的よく見られる程度の個体数はいますし、もしかしたらまた、夏にノスリが見られるようになるかもしれません。

愛媛新聞社. (1992). 愛媛の野鳥観察ハンドブック はばたき. ((財)日本野鳥の会愛媛県支部, 編) 愛媛新聞社.
香川県環境保健部. (1975). 香川県のとりとけもの 昭和 50 年 3 月
香川県教育委員会. (1972). 五色台野鳥目録
香川野鳥の会. (1977). 香川県鳥類目録 A list of Aves in Kagawa 1977. 11. 20
環境庁. (1981). 第 2 回自然環境保全基礎調査(緑の国勢調査)動物分布調査(鳥類)報告書 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局.
四国新聞社. (1996). 香川の野鳥ウォッチングガイド. ((財)日本野鳥の会香川県支部, 編) 四国新聞社.
森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. (1995). 図鑑 日本のワシタカ類. 文一総合出版
日本鳥学会. (2012). 日本鳥類目録改訂第 7 版. 日本鳥類学会.
日本野鳥の会徳島県支部. (1985). 徳島県野鳥図鑑. 徳島新聞社.
野中純. (2015). 低標高地へ進出するノスリ. BIRDER 2015 年 10 月号. 文一総合出版
岡内英孝. (1968). 香川県に於ける野鳥の生態